



明治・大正の翻訳史

吉 武 好 孝 著



研 究 社

明治・大正の翻訳史

¥200.



KENKYUSHA

研究社選書

昭和 34 年 11 月 15 日 印 刷

昭和 34 年 11 月 20 日 発 行

著 者 吉 武 好 孝

発 行 者 小 酒 井 益 藏

東京都千代田区富士見町 2 / 1

印 刷 所 研究社印刷株式会社

東京都新宿区神楽坂 1 / 2

発行所 研究社出版株式会社

東京都千代田区富士見町 2 / 1
振替口座東京 83761 番

ま え が き

外国語の小説や詩や劇などを読んでそれを理解したり鑑賞したりする人の頭のなかには、たえずほんやく活動というものがある。しかし、これはなにも文学にかぎったことではなく、外国語を読んでその意味内容を理解しようとするばあいにはかならず、ほんやくを通すのにきまっている。ほんやくは、この意味では、新鮮で異質的な外国の思想や感情をとり入れるための窓のようなものである。適当に窓をあけて風を通さない家のなかの空気がよどんできたなくなるように、外国思想のすがすがしいきれいな空気を呼吸しない国の文化は生長と発達がそこなわれるか、あるいは、健康美を出しえないであろう。そう考えると、ほんやくという活動は、一国の文化にとっては、もつとも文化的に重要な意味をもつ活動だといわねばならない。

ところで、ほんやくにはもっと狭い意味のほんやくがある。つまり、それは、外国語で書いた文章をただ頭のなかでほんやくし理解しているだけでなく、その意味内容を自分の国のことばをもって写しとり書きとめて文章にしてしまう——そういう意味のほんやくである。そして、このせまい意味のほんやくのなかには、三つのばあいがふくまれている。第一は、げんみつな意味でのほんやくで、原文の意味を一字一

句まちがえずに自国語に写しとるもので、これがわれわれのふつうにいうほんやくである。第二は、いわゆる抄訳、というもので、訳者はかれの読む外国書の意味の全部を原文通りに忠実にうつしとるのでなく、もっとも重要な部分だけを忠実に伝え、そうでない部分はまったく省くか、あるいは、適当にそのおよその意味だけを取り入れて縮訳して原書の生命を生かそうとする。第三は、いわゆる翻案と呼ばれるばあいのはんやくである。これはもっぱら文学、とくに、劇や映画のシナリオなどに用いられる方法で、ほんやく者は原作の筋やおもな思想だけを写しとり適当に按配し考案して自分の作品にしてしまうというほど思いついたほんやくをやるばあいである。しかし、このばあいでも、原作をうつしとって他の外国語に移し植えているのだから、ほんやくであることになんの変りはない。小説や劇などのほんやくの一種として、訳編などよんでいるものも、この種類にふくめてよい。

ところが、「ほんやく」ということばは、もともと、「一つの位置にあるものを他の位置に移す」ことを意味するのだから、そのようなひろい意味からすれば、われわれは、たとえば明治初年の先覚者たちがやったように、外国語の本をよみ、その思想や観念を、日本語の感覚をもつて理解しそしやくしながら、外国語の語彙や観念や考え方などとともに、いわゆる狭い意味のほんやくをしなくても、自分の著書などによつて、日本語にほんやくしてわが国の文化内容に移しうえることもできるのである。そのような、もっともひろい意味のほんやくは、福沢諭吉をはじめとする明治初年の洋学者たちののこした業績にもっともよくみられるものであつて、それは、文化的に立ちおくれしていた日本が西欧の先進国の文化を急速に吸収せねばならないという必要のつづくかぎり、文化的にみて非常に大きな積極的な役割をはたしてくれるも

のである。文化の進歩の程度に先後はなくても、異質的な文化国同志がおたがいに隣りあっていて、おの他の国の文化を自国にとりいれて文化の交流をしようとするようなばあいにも、むろん、このような意味のほんやくがさかんにおこなわれるものである。

今日、欧米の各国間にみられ、また、日本と世界の国々との間にみられているような文化の交流において、いま私のあげたようないろいろな意味のほんやくが、いわば日本文化の窓として、どんなに大きな役割を演じているかは、すでに賢明な読者には十分おわかりのこととおもう。

考えてみれば、日本の近代の文化は、明治、大正、昭和のこの三代の間に、その近代化がはじまり、すすんで、そして、ほぼ完成していったのである。政治も社会も経済も芸術も宗教も文学も道徳も、およそ日本の社会生活のもつすべての分野が、このながいながい約百年の間に、文化革命を経験して新しい近代を身につけてしまったのである。日本の歴史にまだ前例のないこの社会的大変動による日本の近代化の過程においては、外国文化とくに外国文学の思想や感情のほんやく紹介と輸入移植という仕事は、わが国の近代化のために、どんなに大きな啓蒙と変革の仕事をしてくれたことであらう。

私はもともと英文学をやっているもので、この方面の研究の専門家ではない。英文学をやる決心をしたその日からいつも私の頭のどこかにのこっていた第一の疑問は、日本において日本人の感覚をもって果して英文学を十分に鑑賞できた研究することができるだろうか、という点であった。鑑賞するには外国人だというハンディキャップがあり、研究するとしても、本国イギリスにあるほどの文献も参考書も手に入らないというハンディキャップは致命的である。で、私は考えた。日本でやる英文学には限度があるが、そ

れはあってもいいのだ、つまり、日本人のやる英文学は、アメリカ人やイギリス人などのやる日本文学とおなじことで、その各々の限界のなかでやる外国文学でしかないが、それでいいのだ、と。で、私はもう一度考えてみた。そのような消極的な意味しかない英文学をなぜやることにするのか、と。それはこうである。日本人である私にわかる英文学というものはおそらくなにほどもないしまったとるに足らなくとも、日本の文化というひろい視野に立つてみるとき、それがなんの意味もないとだれが断言できよう、自分分は英文学から得てくるそのわずかなものをもって、多少なりとも日本の文化を富ますことに役立てばよいではないか、と。

このように考えて、私がこつこつとおよばずながらも英文学の研究をしているうちに、昭和十年前後から日本のミリタリズムによって日本はぐんと右に曲がり、支那事変から大東亜戦争につづいて、洋書の輸入はパツタリとまって、私どもの研究はもうほとんどできなくなった。で、私は、もともと明治文学に大きな興味をもっていたので、そんな情勢のもとにあつてもできる研究の仕事をつづけたいと決心し、「明治文学におよぼした英語英文学の影響」という題目をかかげて、文部省の「科学研究費」の申請をおもいたち、法政大学を通じてそれを出してみたら、幸いその金がもらえることになった。それに自費なにかしかを足して文献を買いあさって、コツコツ研究をつづけた。そしてその三年目だったと思うが、当時法政大学の高等師範部長をされていた城戸幡太郎先生がある日、私に、「日本の近代以降のほんやく発達史といったような学科をもうけて英文科と国文科の学生にきかせたいが、適当にやれる人がないが、きみやらないか」といわれた。ちょうど折も折、私の一生けんめいやっているところでもあり、自分にも刺激

になることなので、その講義をひきうけて、たぶん、昭和十五年から十八年ころまで「ほんやく文学の発達」という題で講義した。そうしているうち、これは昭和十七年のはじめだったと思う、三省堂の編集部の方から、「語学文庫」になにか書いてくれとたのまれたが、別になにも書けそうもないが、前記の講義の原稿ならすこし手を入れれば出せそうだと答えたのが因縁で、この本の原型『翻訳文学発達史』（昭和十八年七月、三省堂）が出版されることになった。浅学のこの私が、さきに言った講義をあえてひきうけ、その出版をもあえてするのに同意したのは、私なりに理由があったのである。つまり、明治の日本文学は外国文学のしげきがなければその新しい文学としての胎動も生長や発達も考えられないし、その方面の研究は、やはり、純粹な国文学者だけではできないものであって、外国文学をやっているだれかが手をかさなければ完全なものにならない、というのが、私の信念でもあった。それにまた、つまらなくとも、この方面の仕事することによって、日本における外国文学の研究家としての私がいくらかなりとも祖国の文化のために貢献したいというそもそものはじめから私の心のなかに念じていた素志もとげられることになる——そのように考えたからである。

それからまた十数年、幸にして前記の書物は紙型を焼かずにのこった由で、一度同社でも再版の予定だったときいていたが、そのまま眠って今日におよんだ。ところが、一昨年の暮、ある会合に同席した福田陸太郎氏が「あれはあのまま埋れさすのはもったいない、出す意思はないんですか、お出しになる意志があれば研究社の人々に話してみましようか」といつてくれた。それから話がとんとんとすすみ、「すこし手を入れて補うところは補って読みやすくして」という条件で、この書物の原稿の「書きなおし」がはじ

まった。なにぶん、忙わしい仕事のかたわらだから、ボディイはあっても、全部書きなおすとなると、そう簡単にいかず、やつのことで今、それをどうにか書きあげることができた。これはひとえに、友人福田陸太郎氏のあたたかい友情と、理解ある研究社出版部の人々のご好意の賜物であるとともに、遠くは城戸幡太郎先生や当時三省堂にいた友人木暮義雄氏などのご好意のたまものであることをここに書きしるし、衷心より感謝の意を表したい。

ひとこと、おことわりしたいことは、この書物は、どんなほんやく者がいつどこでどんなほんやく書を出しているかということを知る、いわゆるほんやく家列伝ではない。また、近代以降の日本における外国文学のほんやく書の書誌学でもない。この本は、主として外国文学のほんやくによって近代の日本文学がどんな影響をうけ、どんなに文化的に富まされてきたかということ、そのもつとも重要なほんやく者とはんやく書について歴史的にのべてゆこうとするものである。だから、この本は、あるばあいには書物をあつかい、あるばあいには、文学や運動をあつかい、また、あるばあいには人間を論ずることにした。人間と書物と運動、この三つが外国文学のほんやく活動にむすびついて、いかに日本の近代文学を富ましその生長を助けてきているかをのべ、ほんやくというものの果す文化史的な役割を読者とともに考えてみようとするのが、このささやかな書物の抱負であり目的なのである。幸にして、この書物が、世の多くの読者によって愛読されることをねがい、不十分なところがあれば後日をまっつて補うようにしたいと思います。

vii

第十二章	「文学界」をめぐる人々とその他のほんやく家	一六二
第十三章	明治末年から大正年代までのほんやく文学	一八一
第十三章	文学理論ほんやくの発達	二〇〇
第十五章	明治大正詩壇と西欧詩の輸入	二一二
むすび		二三三
索引		二三五

第一章 明治以前のほんやく文学

わが国に西欧の文学がはじめてほんやく紹介されたのは、もちろん、明治になってからのことではなく、それははるか遠く徳川時代のことである。そして、そのきっかけになったものは、日本にあらゆる方面の洋学のひらけはじめる端緒になった蘭学の研究であった。蘭学のもたらしたものにはいろいろあったが、まず第一には、われわれの生活に直結する医学、それにつづいては本草とよばれた薬用植物学、それに兵学や銃砲機械学といったような実用に役立つ学問であった。しかし、文学とはなんの関係もないそのような実学の書物のなかに、たまたまオランダ語に訳されていた『ロビンソン・クルーソー』がまぎれこんでいて、横山由清という人がそれを『魯敏遜漂流行紀略』という題名をつけてほんやくし安政四年に出版したものが、日本に純粹の意味の西欧文学が紹介されたそもその初めであるといわれている。新村出博士や柳田泉氏によれば、完訳ではないがこれより古い訳としては、嘉永のはじめに出た黒田行元訳『漂流記事』という書物の第一巻はロビンソン・クルーソーに関する記事だとのことである。しかし、これは『ロビンソン・クルーソー』を横山由清以前におなじくオランダ語訳からほんやくしたものだとしても、それは明治になってから出版されたものにすぎないから、いわゆる文学書のまとまったほんやくとしては、横

山由清の書を日本で最初のものとするべきであろう。

しかし、ほんやく文学という意味を非常にひろく解釈したばあい、日本人がいつごろから西欧の文学に接したかということになると、これはさらに遠く第十六世紀の後半、いわゆる「吉利支丹文学」とかあるいは俗に「南蛮文学」とよばれているものが日本に入って読まれた時代にまでさかのぼらねばならない。そして、そのばあい、文学は、いわゆる文学とはいっても純粹な意味での文学ではなくなってくるのである。

ところで、このキリシタン文学というのは、第十六世紀半ばから十七世紀の半ばにいたる時代、わが天文時代の末から寛永年間にいたる約百年間において、当時の西日本すなわち島原半島の東端の加津佐、天草、長崎などにキリスト教の布教を目的として渡来していたローマ公会教すなわち天主教の師徒たちが、日本文をもつて著述したり或いはほんやくした宗教文学と、それに関連して出版された宣教用や語学用の読みものの類のすべてを総称した名称なのである。そして、この耶蘇会の手で出版されたおもなものは、みんな、文禄年間から慶長にいたるまでの二十年間に出版され、その文体は通俗むきの文章体のもの、方言をまじえた標準的な口語文体のもの、仮名まじりのもの、ローマ字で書いたものなどさまざまなものから成りたっている。そして、そのなかには、創作された宗教小説が十余種類もふくまれており、当時すでに長崎では紀元前一世紀のローマの詩人ヴァージルの叙事詩篇をいくつか翻刻したという記録さえこのころ、天草版ものの日本文典のなかには、ギリシャ、ラテンの詩文の断片が散見し、宗教のほんやく書のなかには、西洋古典からの聖徒たちの短いことばが引用されたりしているといわれる。

これらの中で、ほんやく文学史の立場からみてもっとも古くてしかも重要なものは、豊臣時代の文禄二年に天草の耶穌会学問所から出た『エソポのフワブラス』という『イソップ物語』の抄訳である。訳者は不干^{ふかん}ハビアンという名前の日本人で、もと仏僧だった人がキリスト教徒に改宗した人だという。イソップという人は紀元前五百年から六百年ころのギリシャの賢人であって、比喩談の名人として知られ、かれの寓話は、ヨーロッパではすでに十五世紀の後半に各国語にほんやくされひろく読まれていたので、十六世紀の後半になって吉利支丹宗が東洋に伝播するようになってから、ひとつには渡来した宣教師たちの日本語の勉強に役立てるために、またもうひとつには、お説教の補助的な読みものとして日本にも輸入されほんやくされたものである。

前にのべたように、この物語は最初天草で口語体をもって訳されたが、後に京都から別の系統の訳本ができて俗文体に訳されたものがいく度か改版されて流布した。後者は『伊曾保物語』という名前で慶長から元和、寛永年間に数回印刷されて民間に流布し、さらに天保年間におよんでいる。前者の天草本の抄訳の方は、日本における洋書ほんやくの最初のものであって、ポルトガル式のローマ字綴りの口語訳に書かれており、『平家物語』や『金句集』などと合冊にして文禄二年ころに出版され広く読まれたものである。

こうみてくると、ひろい意味では『イソップ物語』のほんやく書こそはわが国におけるほんやく文学の草わけということになるのだが、この書物が早くもこの時代にほんやくされ出版されたということは、ただ単にそれだけの意味におわるのではない。この訳書は封建時代を通じて大衆読みものになっていたばかりでなく、その後も明治大正をへて昭和の今日におよんでも、幾百種にものぼるほんやく書になって一般

大衆の好読みものになってきたことをおもえば、それがわが国の近代文化の発達に貢献した功績は非常に大きいといわねばならない。

さらにまた、封建時代を通じてほんやく文学の代表とみなされるこの『イソップ物語』には、徳川時代だけでも三、四種類の訳がでているが、それらが直接に日本文学のどの作品に影響したという確かな証拠はなくても、水谷不倒が指摘しているように、仮名草紙の大部分が間接にこの物語の影響をうけ、そのなかでも、仮名草紙にみられる教訓文学としての一面は、明かにその影響だとみられることである。そういうことになる、われわれは、ほんやくという一つの活動がただ単に原著の文字を他の国の外国語に移し植えるというひとつの技術にとどまるものでなく、それを通じて、読者の思想内容や感情の実質にまで深く浸みこみ、その方向をも左右しないではおかぬほどの文化的な創造の役割をはたすものであるという事実を今さらのように考えてみないではいられない。

それはともかくとして、元和刊本の『戲言養氣集』の下巻には、烏と狐の話がとり入れられ、寛文二年版の『為愚痴物語』巻一には鼠の相談の話が収められているほどだから、この物語がずいぶんひろく読まれていたことが想像される。さらにくだって徳川末期の『永春水は、絵入教訓近道』のなかで、合計十九篇の話のうち『伊曾保物語』から十六篇をとっているという事実もあり、幕末には吉田松陰が道光二十一年に漢訳のイソップ物語である『意拾喻言』から比喩談をとって国事を慨歎したという逸話がのこっているくらいだから、この物語が日本の思惟にふかくふかくとけこんでいたことは、われわれの想像以上のものがある。

明治以前のほんやく文学中つぎに注意すべきものは、おなじく吉利支丹文学のなかにふくまれている宗教の信仰に関する物語である。それは、前にちよつとのべた耶蘇会の刊本のなかにあるトマス・ケンピス (Thomas a Kempis) の『基督模倣』(Imitatio Christi) すなわち、聖範とよばれるもののほんやくである。この書物は、はじめ『こんてんつす・むんぢ』(厭世経) という表題で慶長元年(一五九六年)に天草からローマ字本として出版され、後に慶長一五年(一六一〇年)に京都から仮名まじり文の訳として印刷されたものである。この書物もかなりひろく読まれていたものだが、宗門の書だったためにやがて禁ぜられてしまった。

これにつづいては、ルイス・グラナダ (Luis de Granada) の名著『ギャ・ド・ペカドル』(罪人善導) がある。これは慶長四年(一五九九年)の出版でキリシタン文学のなかでは最もひろく愛読されたものだとされている。

要するに、吉利支丹文学というのは、日本人が十六世紀、十七世紀にわたって接した西欧文学ということになるのであるが、これ以後は、幕府の鎖国政策にわざわいされて西欧文学のほんやくと紹介はまったくなくなった観があり、まったく心細い状態になって明治時代をむかえるのである。ただひとつ、安永三年(一七七四年)に出版された『和莊兵衛異国奇談』がイギリスの諷刺作家スウィフトの『ガリヴァー旅行記』の翻案であるという説があるし、また、文化七年(一八一〇年)正月に、江戸の市村座で上演された『心謎解色絲』がシェイクスピアの『ヴェニスの商人』と非常によく似ているところから、この二つにはきつとふかい関係があるのではないかといわれているが、定説にはなっていないようである。

文久元年には神田孝平がオランダの探偵小説二つを集めて訳し、それを『和蘭美政録』という名で出した。そのうちの一篇「ヨンケル・ファン・ロデレイキ事件」というのは、明治十年になって、成島柳北の主筆する「花月新誌」に連載されたものだが、これは原著者は不明となっているけれども、おそらく探偵小説のほんやくでは日本で最初のものであるうとおもわれる。

以上にのべたように、明治以前にもほんやく文学といえるものがないわけではないが、しかし、この方面の活動が本格的になるのは、むしろ、明治の新しい文化がおとずれて以後のことである。このながい鎖国の時代は、ただ単に政治方面の鎖国だったばかりでなく、ひろく一般文化の閉塞になっていたわけであって、この時代におけるわが国の国民は、わずかにオランダ人やポルトガル人と、少数のオランダの学者たちを通じて外国の知識や情報をうけとって満足しているほかに道がなかったのであった。